美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要
1993, Vol. 38, 42〜52

小・中学生の音楽行動について（Ⅲ）

—経年的な変化及び地域的な変化の観点より—

A study on music behavior of pupils（Ⅲ）

杉　山　知　子

Ⅰ．研究目的

音楽に夢中になる年代は10代後半が最も多く，次いで20代前半，10代前半であるという調査結果が報告されている[1)]。10代前半は，小学校５年生から中学３年生に相当し，この時期はいわゆる青年前期に当たり，精神的・身体的発達が著しい。そのような時期に子どもは音楽に熱中しはじめるのであるが，彼らにとって音楽はどのような役割を果たし，また，彼らはどのような音楽行動をとるのであろうか。

その音楽行動に関しては，すでに拙稿（Ⅰ）[2)]（Ⅱ）[3)]において述べたが，紙面の都合上，年齢や地域差については言及しなかった。

ところが，生徒の音楽行動を考察するためには，それらに言及することが必要不可欠であると考えられる。

そこで，本論では年齢と音楽行動の関係，及び地域と音楽行動の関係について分析・考察を行う。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象・人数及び時期については表１のとおりである。

表１　調査対象・人数・時期

調査家対象校	５年生	６年生	１年生	２年生	３年生	調査時期
M小学校	58名	74名	−	−	−	1986年８月
M中学校	−	−	185名	206名	199名	1988年７月
K中学校	−	−	68名	89名	130名	1989年７月
C中学校	−	−	107名	118名	130名	1989年７月
R中学校	−	−	80名	88名	82名	1989年７月
T中学校	−	−	100名	99名	101名	1989年７月

２．調査方法及び内容

教室での一斉記入による質問紙調査

１）　音楽行動に関する質問——12項目

２）　音楽意識に関する質問——９項目

今回，分析の対象となるのは音楽行動に関する12項目についてである。それらの質問紙の詳しい内容は巻末に資料としと示す。

Ⅲ．結果及び考察

まず，年齢と音楽行動の関連について検討する。検討するに当たり，結果が類似性を有するものは一括して示すことにする。

１．音楽行動における経年的変化

M小学校５年生からM中学校３年生における調査結果は次の通りである。なお，M小学校とM中学校の地域環境は，ほぼ同じである。

表２は「友だちと音楽の話をする」についての結果である。「よくある」と回答した比率は５年生の11%

表２　「友だちと音楽の話をする」

人数（ ）内は%

	５年生	６年生	中学１年生	中学２年生	中学３年生
よくある	6 (11)	11 (15)	33 (18)	47 (23)	78 (39)
ときどきある	23 (40)	28 (38)	75 (41)	81 (40)	69 (35)
ほとんどない	29 (51)	35 (47)	77 (42)	76 (37)	52 (26)
計	57	74	185	204	199

から中学生の39%であり，漸次高くなっている。「ときどきある」は全学年を通してあまり変わらない。「ほとんどない」と回答した比率は5年生で51%であったものが，中学3年生では26%になっており，学年が上がるにつれて低くなっている。

表3　「音楽テープ・CD等を買う」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	7 (12)	11 (15)	54 (29)	88 (43)	103 (52)
ときどきある	21 (36)	19 (26)	61 (33)	75 (37)	66 (33)
ほとんどない	30 (52)	44 (59)	69 (38)	41 (20)	30 (15)
計	58	74	184	204	199

表3は「音楽テープ・CD等を買う」についてである。この項目も「よくある」は5年生で12%であったものが，中学3年生では52%と増加傾向を示す。「ときどきある」は全学年ほぼ同じであり，「ほとんどない」は5年生52%から中学3年生15%へと減少傾向を示す。

表4　「友だちと音楽テープ等の貸し借りをする」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	0	2 (3)	35 (19)	66 (33)	99 (50)
ときどきある	3 (5)	7 (9)	50 (27)	78 (38)	61 (31)
ほとんどない	55 (95)	65 (88)	99 (54)	59 (29)	38 (19)
計	58	74	184	203	198

表4の「友だちと音楽テープ等の貸し借りをする」については，小学生は「ほとんどない」の回答が5年生95%，6年生88%となっている。

しかし，中学生になると，「ほとんどない」は急減し，「よくある」が急増する。

小学生と中学生におけるこの差は顕著である。また中学生の中でも，「よくある」は1年生19%，2年生33%，3年生50%と学年毎に急上昇している。

表5　「音楽関係の雑誌・本を読む」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	10 (17)	13 (18)	51 (28)	49 (24)	71 (36)
ときどきある	11 (19)	17 (23)	52 (28)	71 (35)	68 (34)
ほとんどない	37 (64)	44 (59)	82 (44)	85 (41)	59 (30)
計	58	74	185	205	198

表5の「音楽関係の雑誌・本を読む」については，表2・3・4のような大きな増加は見られないが「よくある」，「ときどきある」が確実に増えている。「よくある」は5年生17%から中学3年生36%に増加し，「ときどきある」は同じく19%から34%に増加するなど，類似した増え方になっている。それとは逆に，「ほとんどない」は64%から30%へと急減している。

以上，表2から表5までを概観すると，全体的には年齢に伴い「よくある」という回答が増えている。特に，「音楽テープ等の貸し借りをする」においては，「よくある」が中学3年生で半数以上になっている。

児童期後期に当たる小学校5・6年生は，「それまでの親，教師，成人への依存から離れて，仲間集団への所属の傾向が強まり，仲間による『承認』がより重要になってくる」[4] といわれている。

音楽テープ等を「親」から買い与えられるのではなく，「自分」で買う行為が増え，友だちとそれらを貸し借りすることは，大人からの独立と仲間集団への所属意識を高めることにつながっているのではないだろうか。

このように，仲間に所属していたい，仲間から認められたいという気持ちは，「友だちとのつきあいのなかで話題を合わせるために最新流行の音楽に異常なほどの関心をもつ」[5] 子どもの心理的特性であると考えられる。

表6　「音楽テープ・CD等を聴く」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	12 (21)	26 (35)	105 (57)	133 (66)	157 (79)
ときどきある	40 (69)	30 (41)	48 (26)	52 (26)	19 (10)
ほとんどない	6 (10)	18 (24)	32 (17)	18 (9)	23 (12)
計	58	74	185	203	199

表6の「音楽テープ・CD等を聴く」については，「よくある」と回答した比率が5年生21%から中学3年生79%となっている。「ほとんどない」は，6年生において24%と他よりやや多いが，そのほかの学年は大差ない。

これより，音楽テープやCDを聴く子どもの学年に伴う増加の一方で，「ほとんど音楽テープ等を聴かない」という子どもが，学年に関係なく存在していることは明らかである。

表7　「テレビの音楽番組を見る」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	22 (39)	29 (39)	96 (52)	106 (52)	136 (68)
ときどきある	24 (43)	20 (27)	58 (32)	64 (31)	43 (22)
ほとんどない	10 (18)	25 (34)	30 (16)	35 (17)	20 (10)
計	56	74	184	205	199

表7の「テレビの音楽番組を見る」については，「よくある」の回答は，5・6年生と中学1・2年生，及び中学3年生の3つのグループに分けることができる。すなわち，5・6年生は39%，中学1・2年生は52%，中学3年生は68%で，段階的に急増している。一方，「ほとんどない」の回答は6年生34%と多いが，その他の学年は10%から18%で差があまりない。

以上，表6と表7においてはどちらも，「よくある」は学年毎，あるいは段階的に急増し，「ほとんどない」は学年間の差があまりない。すなわち，「音楽テープやCDを聴く」ことと「テレビの音楽番組を見る」ことに関しては，積極的な行動をとる子どもが増える。その反面，関心のない子どもも5年生から中学3年生で同じ比率で存在している。このように，音楽テープ等を聴く行動とテレビの音楽番組を見る行動が経年的に同じ傾向になった理由としては，聴取メディアは異なるけれども，音楽を聴くというところに共通点があるためだと考えられる。

しかし，聴取メディアの利用比率は表6と表7より小学生と中学生において明らかに逆転している。すなわち，小学生はテレビへの依存が強く，中学生は音楽テープやCDへの依存が強い。

このようなメディアによる聴取形態は音楽に対する意識のあり方を決定する。テレビの音楽は選択の余地が少なく，受動的な聴き方になるが，一方，音楽テープやCDは能動的な聴き方になる。このような傾向を促していることとして，中学生はテレビを見ながら勉強することが少なくなり，代わりにラジカセで音楽テープやCDを聴きながら勉強することも考えられる。

表8　「学校外で歌をうたう」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	5 (9)	12 (16)	50 (27)	46 (23)	55 (28)
ときどきある	27 (49)	20 (27)	61 (34)	72 (35)	71 (36)
ほとんどない	23 (42)	42 (57)	71 (39)	86 (42)	73 (37)
計	55	74	182	204	199

表8の「学校外で歌をうたう」については，「よくある」の回答が漸次増えている。しかし，全体的に見て行動は積的的とはいえない。「ほとんどない」は6年生が他の学年に比べて多いが，そのほかの学年は学年間に差が見られない。

このように，歌をうたう行動は積極的であるとはいえないが，「よくある」と回答する子どもが確実に増えている。それは，その年代の自己表現として，歌が利用されるということ，テレビなどで活躍する同じ年代の子どもたちに刺激された結果ではないだろうか。

表9　「学校外で楽器を演奏する」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	10 (18)	11 (15)	35 (19)	28 (14)	39 (20)
ときどきある	27 (47)	33 (45)	34 (18)	37 (18)	27 (14)
ほとんどない	20 (35)	29 (40)	116 (63)	139 (68)	133 (67)
計	57	73	185	204	199

表9の「学校外で楽器演奏する」については，「よくある」は14%から20%にまとまっており，学年間の差は見られない。しかし，「ときどきある」と「ほとんどない」は逆の傾向が見られる。

すなわち，小学生と中学生で逆転している。小学生では「ときどきある」が45%から47%で，「ほとんどない」の回答より多くなっている。これに対し，中学生は「ほとんどない」が63%から68%で「ときどきある」よりはるかに多い。

以上，小学生から中学生にかけて継続的に「よく楽器演奏する」子どもがいるということ，さらに，小学生時代には「ときどき楽器演奏する」子どもが中学生になると「ほとんど楽器演奏しない」状態に変化している。

学校外での楽器演奏といえば，ピアノ・オルガン等のおけいこや，ドラム・ギター等のバンド演奏が考えられる。前者についていえば，学校外で音楽を習っているかどうかという質問の追跡調査より，次の結果を得ている[6]。すなわち，小学生時代は男子3名，女子28名が習っているが，中学生になると男子2名，女子15名に減少している。このように，中学生になるとおけいこを辞める子どもがいるために，楽器演奏を「ときどきする」子どもが減るものと考えられる。

表10　「家族と一緒にうたう」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	4 (7)	4 (5)	3 (2)	5 (2)	8 (4)
ときどきある	11 (19)	14 (19)	31 (17)	19 (9)	24 (12)
ほとんどない	42 (74)	56 (76)	150 (82)	180 (88)	167 (84)
計	57	74	184	204	199

表11　「家族と音楽の話をする」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	5 (9)	12 (16)	20 (11)	20 (10)	23 (12)
ときどきある	22 (38)	24 (32)	57 (31)	53 (26)	70 (35)
ほとんどない	31 (53)	38 (51)	106 (58)	132 (64)	195 (53)
計	58	74	183	205	198

表12　「音楽会に行く」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	1 (2)	2 (3)	4 (2)	9 (4)	12 (6)
ときどきある	11 (19)	11 (15)	30 (16)	28 (14)	29 (15)
ほとんどない	45 (79)	60 (82)	149 (81)	167 (82)	156 (79)
計	57	73	183	204	197

表13　「作詞・作曲する」

人数（ ）内は%

	5年生	6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生
よくある	4 (7)	5 (7)	3 (2)	9 (4)	9 (5)
ときどきある	8 (14)	9 (12)	22 (12)	23 (11)	14 (7)
ほとんどない	45 (79)	60 (81)	159 (86)	173 (84)	176 (88)
計	57	74	184	205	199

また，後者のバンド演奏については，中学時代から盛んになるが，一部の生徒の，限られた時期に集中して行われており，多くの生徒が日常的に演奏するところまでは至っていない。

表10の「家族と一緒に歌う」については，全学年通して「ほとんどない」が多く，「よくある」は２％から７％，「ときどきある」は９％から19％である。

表11の「家族と音楽の話をする」についても，全学年変化がなく，「よくある」のは10％強である。過半数の子どもは「ほとんどない」としている。

表12の「音楽会に行く」については，「よくある」は２％から６％であり，全学年通してあまり行っていない。「ときどきある」も15％前後で低調である。

表13の「作詞・作曲する」については，「よくあるが２％から７％，「ときどきある」が７％から14％で「ほとんどない」が多数を占める。学年による差は見られない。

表10から表13については，「よくある」と回答した生徒は数パーセントであり，過半数の生徒は「ほとんどない」と回答している。すなわち，音楽行動は積極的とはいえない。

また，これらは，５年生から中学３年生まで変化が見られず，成長に伴う行動とは判断されない。

このように行動が低調なのは，これらの行動項目が友だちとの交流につながりにくいことが原因ではないかと考えられる。特に表10・表11は「家族と」であるため積極的な行動にならないのであろう。

また，表12の「音楽会に行く」については，次に述べるように地域的な条件も影響するものと考えられる。

２．音楽行動における地域的な変化

調査対象校は異なった地域に位置する５つの中学校である。この５つの中学校は，岡山県北部と南部，あるいは都市部と町村部，都市周辺部というような分け方により抽出した。

１） 調査対象校の地域環境

M中学校

岡山県北部の町村部にあり，農業・商業・工業の入り混じった農村地域である。町村部としては人口が比較的多く，学校規模は生徒数約600名と中規模といってよい。

K中学校

岡山市の中心部にあり，まさに文化・経済の中心に位置している。しかし，繁華街とは少し離れており，住宅や学校の多い文京地区にある。

生徒数は約1100名の大規模中学校である。

C中学校

岡山市内であるが，比較的周辺地域に当たる。そのため，古くからの住人の多い住宅地である。しかし最近では団地ができ，新しい住人も増えるなど様相が変わりつつある。

生徒数900名余りの大規模校である。

R中学校

岡山市内の東部に位置し，いわゆる新興住宅地の中にある学校である。したがって，昔から住んでいる人よりは新しい人の割合が比較的多い地域といえる。生徒数は約1400名で調査した５校の中では最大規模の中学校である。

T中学校

瀬戸内海に近く，工業と商業の盛んなT市内にある。学区内には大企業の社宅が多く，したがって，サラリーマン家庭の子どもが多い。

生徒数はおよそ600名で中規模の学校である。以上が調査対象となった環境である。

２） 音楽行動における地域的な差

表14 「学校外で歌をうたう」

人数（　）内は％

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	151 (26)	59 (21)	123 (35)	66 (26)	75 (25)	474 (27)
ときどきある	204 (35)	105 (37)	134 (38)	95 (38)	113 (38)	651 (37)
ほとんどない	230 (39)	121 (42)	96 (27)	88 (35)	107 (36)	642 (36)
計	585	285	353	249	295	1767

表14の「学校外で歌をうたう」については，全体的には「よくある」，「ときどきある」，「ほとんどない」が均等に分布した回答とみなすことができる。

個々に見ると，C中学校における行動が他よりも積極的であると思われるので，有意差の検定を行った。

その結果，C中学校と他の4校間に5％水準で有意差が見られる。しかし，M・K・R・T中学校においては，どの2校間にも有意差は見られない。

表15　「友だちと音楽の話をする」

人数（　）内は％

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	158 (27)	77 (27)	128 (36)	83 (33)	97 (32)	543 (31)
ときどきある	225 (38)	115 (40)	144 (41)	82 (33)	111 (37)	677 (38)
ほとんどない	205 (35)	95 (33)	81 (23)	86 (34)	91 (30)	558 (31)
計	588	287	353	251	299	1778

表15の「友だちと音楽の話をする」については，表14と同じような傾向であり，全体的に選択肢3つが均等に分かれている。有意差の見られる学校間はMとC，MとR，MとT，KとC，KとR，KとT，CとR，CとTであり，有意差の見られない学校間はMとK，RとTである。この検定結果より5つの中学校は行動内容により3つのグループに分けられる。すなわち，C中学校，RとT中学校グループ，MとK中学校グループの3つである。

さらに，表15の数値と考え合わせると，友だちと音楽の話をするという行動の多い順に，1.C中学校，2.R中学校とT中学校，3.M中学校とK中学校，ということになる。

以上，表14・表15からは，学校外で歌をうたう行動や友だちと音楽の話をする行動は，C中学校生徒が他の4つの中学校生徒に比べて多いという結果が得られた。

C中学校の地域的環境については，市内でも比較的周辺部に位置し，新旧の住人が混然と一体化したところである。この2点に関してはR中学校と似通っている。学校規模はR中学校の生徒数が1400名であるのに対し，C中学校は900名であるが，両校とも大規模校といえる。このように，比較的似た環境にあるC中学校とR中学校においても，学校外で歌をうたう行動や友だちと音楽の話をする行動に関しては，C中学校の方がより活発である。これは，地域社会の影響というよりは，その中学校の持つ個性とか雰囲気ということで考える方が妥当であろう。

また，学校の位置する地域環境の点で地域差の最も大きいと考えられる，M中学校とK中学校では「学校外で歌をうたう」，「友だちと音楽の話をする」の両項目共に有意差は見られない。

地域差ということは教育や文化など多様な面の差を含んでおり，子どもの精神的・身体的発達に影響を与えると考えられるが，これら2つの音楽行動においては地域差は考えにくいと結論付けられる。

表16　「学校外で楽器演奏する」

人数（　）内は％

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	102 (17)	61 (21)	72 (20)	41 (16)	43 (14)	319 (18)
ときどきある	98 (17)	44 (15)	77 (22)	59 (23)	56 (19)	334 (19)
ほとんどない	388 (66)	180 (63)	205 (58)	152 (60)	196 (66)	1121 (63)
計	588	285	354	252	295	1774

表16の「学校外で楽器演奏する」については5校全体で18％の生徒が「よくある」と回答している。「ときどきある」は19％，「ほとんどない」は63％である。各中学校ごとに見ると多少の変動はあるが，検定の結果，有意差は見られない。

学校外での楽器演奏といえと，1節の表9において述べたように，音楽教室等でのおけいこやグループでのバンド演奏が考えられる。音楽教室等で楽器を習っているのは都市部の学校生徒の方が，農村部の学校生

徒よりも多い[7]。このため，都市部と農村部における音楽行動の差を予想したが，有意差はない。

このことは，音楽教室等で楽器を習っていることと日常の演奏活動の多少が直結はしないことを示している。

表17　「家族と一緒にうたう」

人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	16 (3)	7 (2)	14 (4)	9 (4)	10 (3)	56 (3)
ときどきある	74 (13)	32 (11)	55 (15)	33 (13)	32 (11)	226 (13)
ほとんどない	497 (84)	247 (86)	285 (80)	210 (83)	256 (86)	1495 (84)
計	587	286	354	252	296	1777

表17の「家族と一緒にうたう」については，5校全体で3%の生徒が「よくある」と回答している。「ときどきある」は13%，「ほとんどない」は84%である。検定の結果，5校間の有意差は見られない。

表18　「家族と音楽の話をする」

人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	63 (11)	28 (10)	58 (16)	30 (12)	27 (9)	206 (12)
ときどきある	180 (31)	93 (32)	128 (36)	85 (34)	95 (32)	581 (33)
ほとんどない	343 (58)	165 (57)	168 (47)	136 (54)	177 (59)	989 (56)
計	586	286	354	251	299	1776

表18の「家族と音楽の話をする」については，5校全体で12%の生徒が「よくある」と答えている。「ときどきある」は33%，「ほとんどない」は56%である。検定の結果，5校間の有意差は見られない。

以上，表17・18については，5つの中学校間に有意な差は見られない。

「家族と一緒にうたう」，「家族と音楽の話をする」というのは，家庭内でのコミュニケーションに関する事項である。したがって，それらの行動の多い少ないは，年齢の近い兄弟がいるかどうかというような家族構成や，家族の音楽に対する関心度など家庭の雰囲気に反映される。このことは，地域の差となって行動に影響を与えると考えたが，これらの行動における地域的な差は見られない。

表19の「音楽会に行く」については，どの中学校とも行動は少ない。「よくある」は5%，「ときどきある」は18%，「ほとんどない」は77%となっている。5つの中学校は，数値で見ると同じようであるが検定した結果，MとK，MとC，MとR，TとK，TとC，TとR，の各中学校間には有意差が見られる。

しかし，MとT，KとC，KとR，CとR，の各中学校間には有意差は見られない。

M中学校はT中学校以外の3校すべてと有意差が見られる。この3校，すなわち，K・R・C中学校は岡山市中心部や周辺部に位置しており，音楽会の開催数や交通機関の点で，農村部にあるM中学校よりは有利な条件下にある。

一方，T中学校は農村地域ではないが，岡山市に比べると諸条件は不利になる。

「音楽会に行く」ということは，行くことが可能かどうかという地理的条件や交通機関の問題，また，音楽会の開催頻度に関わっている。すなわち，文化や経済の中心地域に位置する学校生徒の方が，そうでな

表19　「音楽会に行く」

人数（　）%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	25 (4)	16 (6)	20 (6)	13 (5)	12 (4)	86 (5)
ときどきある	87 (15)	57 (12)	83 (23)	52 (21)	48 (16)	327 (18)
ほとんどない	472 (80)	214 (75)	246 (69)	185 (73)	239 (80)	1356 (77)
計	584	287	349	250	299	1769

い地域の生徒よりも音楽会に行く条件としては恵まれている。この点で差が生じたと考えられる。

表20　「音楽テープ・CD等を聴く」　人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	395 (67)	198 (69)	272 (77)	176 (70)	189 (63)	1230 (69)
ときどきある	119 (20)	62 (22)	56 (16)	53 (21)	62 (21)	352 (20)
ほとんどない	73 (12)	25 (9)	26 (7)	21 (8)	48 (16)	193 (11)
計	587	285	354	250	299	1775

表20の「音楽テープ・CD等を聴く」については，5校全体で69%の生徒が「よくある」と回答している。「ときどきある」は20%，「ほとんどない」は11%である。中学校により数値に苦干の違いが見られるので検定したところ，次の学校間に有意差が認められる。すなわち，MとK，MとC，MとR，TとK，TとC，TとR，の6校間である。また，有意差の見られないのは，MとT，KとC，KとR，CとR，の4つの学校間である。この学校間の差は表19の「音楽会に行く」における差と同じである。すなわち，岡山市のK・C・R中学校と岡山市以外のM・T中学校の間に有意差が見られ，前者の方が，音楽テープ等もよく聴いているのである。

表21　「音楽テープ・CD等を買う」　人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	245 (42)	131 (46)	179 (50)	111 (44)	113 (38)	779 (44)
ときどきある	202 (34)	87 (30)	87 (25)	74 (29)	98 (33)	348 (31)
ほとんどない	140 (24)	68 (24)	87 (25)	67 (27)	86 (29)	448 (25)
計	587	286	353	252	297	1775

表21の「音楽テープ・CD等を買う」については，5校全体で「よくある」は44%，「ときどきある」は31%，「ほとんどない」は25%である。5校とも数値の上では大差ないと見られるが，有意差について検定したところ，T中学校は他の4校すべての中学校と有意差が見られる。しかし，M・K・C・Rの各中学校間には有意差は見られない。

検定結果と表21の数値から，T中学校生徒は他の4校生徒に比べて，音楽テープ等を買うことがやや少ないと考えられる。

T中学校は市部の住宅地から通う生徒が多いが，音楽テープ等の購入に不便というわけではない。したがって，購入条件の整備はなされた上での地域差と考えられる。

表22　「友だちと音楽テープ等の貸し借りをする」　人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	200 (34)	115 (40)	136 (38)	98 (39)	105 (35)	654 (36)
ときどきある	189 (32)	86 (30)	114 (32)	82 (33)	83 (28)	554 (31)
ほとんどない	196 (33)	85 (30)	104 (29)	72 (29)	110 (37)	567 (32)
計	585	286	354	252	298	1775

表22の「友だちと音楽テープ等の貸し借りをする」については，5校全体で「よくある」は36%，「ときどきある」は31%，「ほとんどない」は32%であった。5つの中学校間の有意差は見られない。

表23の「テレビの音楽番組を見る」については，5校全体で，「よくある」は57%，「ときどきある」は29%，「ほとんどない」は14%であった。

各中学校間の有意差は見られない。

表23　「テレビの音楽番組を見る」　人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	338 (57)	146 (51)	215 (61)	145 (58)	163 (55)	1007 (57)
ときどきある	165 (28)	97 (34)	103 (29)	67 (27)	92 (31)	524 (29)
ほとんどない	85 (14)	44 (15)	36 (10)	40 (16)	43 (14)	248 (14)
計	588	287	354	252	298	1779

表24　「音楽関係の雑誌・本を読む」　　人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	171 (29)	80 (28)	107 (30)	83 (33)	83 (28)	524 (29)
ときどきある	191 (32)	87 (30)	123 (35)	74 (29)	96 (32)	571 (32)
ほとんどない	226 (38)	120 (42)	123 (35)	94 (37)	119 (40)	682 (38)
計	588	287	353	251	298	1777

表24の「音楽関係の雑誌・本を読む」については，5校全体で，「よくある」は29%，「ときどきある」は32%，「ほとんどない」は38%であった。

各中学校間の有意差は見られない。

表25　「作詞・作曲する」　　人数（　）内は%

	M中学校	K中学校	C中学校	R中学校	T中学校	5校全体
よくある	21 (4)	12 (4)	19 (5)	12 (5)	7 (2)	71 (4)
ときどきある	59 (10)	31 (11)	48 (14)	30 (12)	62 (21)	230 (13)
ほとんどない	508 (86)	243 (85)	287 (81)	209 (83)	229 (77)	1476 (83)
計	588	286	354	251	298	1777

表25の「作詞・作曲をする」については，5校全体で，「よくある」は4%，「ときどきある」は13%，「ほとんどない」は83%であった。

各中学校間の有意差は見られない。

表22から表25については，地域差は全く見られない項目である。どの地域の生徒も，テレビの音楽番組はよく見ており，3分の1の生徒は友だちと音楽テープの貸し借りを積極的に行っている。作詞・作曲といった能動的な行動は多くの生徒は行わないが，音楽関係の雑誌等はよく読んでいる。

Ⅳ．まとめ

音楽行動における経年的な変化と地域的な差について述べてきたが，それらをまとめると次のようになる。

まず，経年的な変化については次の3つに分けられる。

1）経年的な変化が見られ，行動が増加する項目
- 「友だちと音楽の話をする」
- 「音楽テープ等を買う」
- 「友だちと音楽テープ等の貸し借りをする」
- 「音楽関係の雑誌・本を読む」

2）経年的な変化が見られず，行動は消極的である項目
- 「家族と一緒にうたう」
- 「家族と音楽の話をする」
- 「音楽会に行く」
- 「作詞・作曲する」

3）経年的な変化のある部分とない部分が混在する項目

① 全体的には積極的行動に変化するが，無関心を示す子どもが常に同じ比率で存在する項目
- 「音楽テープ・CD等を聴く」
- 「テレビの音楽番組を見る」
- 「学校外で歌をうたう」

② 全体的には消極的行動に変化するが，積極的な行動をとる子どもが常に同じ比率で存在する項目
- 「学校外で楽器を演奏する」

これらの知見から，音楽行動の中でも音楽テープ等を買う・貸し借りする・音楽の話をするなど，聴取活動に付随する行動は年齢に伴って活発になることがわかる。「音楽の話をする」という項目においては，話相手が家族の場合には経年的な変化は見られず，しかも，行動は低調である。話相手が友だちの場合には，その行動は急増する。これは，友だちとの交流の中で音楽の存在が年齢と共に急激に重要な位置を占めるようになることを示している。

アラン・P.メリアムは音楽の機能として10種類の事項を提示している[8)]。その中で「社会の統一に貢献する機能」として，音楽は「社会の構成員が結集する連

帯意識の一致点を提供することによって，社会を統一する機能を現に果たしている[9)]」と述べているように小学校高学年から中学校の時期において，仲間との連帯意識を育てる上で，音楽は大きな役割を果たすと考えられる。

一方，歌う・演奏する等の表現行動は，それに対して，無関心な態度を示す子どもと，逆に，熱心な態度を示す子どもというように，子どもの行動が二極化する傾向にある。この理由として，興味の対象の分散化が考えられる。それは，男女における興味の差としてまた，仲間関係における興味の固定化などが挙げられる。そのため，このような二極化が起こると考えられる。

以上のように，音楽行動は聴取と表現において，子どもに果たす役割が異なっている。聴取行動は友だちとの連帯意識を高めるという精神的安定の役割を果たしており，表現行動は芸術的な美の追求を通して精神的な満足を与えるという役割を果たしている。

音楽行動の地域的な差については，調査した12項目のうち，「音楽会に行く」，「音楽テープ・CD等を聴く」の２項目について有意差が見られる。それは都市部と農村部という分けかたによる差で，都市部生徒の方が農村部生徒よりも行動は多い。

「音楽会に行く」については，文化施設等の整備状況や催し物の回数の点で都市部の方が有利な条件下であろうと予想されたが，結果は予想したとおり，都市部の生徒の方が農村部の生徒よりは音楽会によく行っている。

「音楽テープ・CD等を聴く」についても、都市部の生徒の方が農村部の生徒よりは行動が多い。しかし，聴取行動に付随した，音楽テープ等の貸し借りやそれらの購入，音楽の話については差は見られない。この点に関しては，本論では明らかにできないので，今後の研究の課題のひとつとしたい。

また，歌う，楽器演奏する，作詞・作曲するなどの表現行動に関しては，都市部と農村部の差は見られない。このような都市部と農村部との類似は，今日，マス・メディアの発達・普及が，音楽を含めた文化の伝達速度を速めていることに起因しているのではないだろうか。さらに，生活レベルにおいても多くの人が中流意識をもつなど，都市と田舎の生活水準が平均化している。これらの結果として，精神生活の上においても意識が均一化されやすくなっているのではないか。

音楽行動としての地域差が最小限に留まっているのは，以上のような理由によるのではないかと考えられる。

＜註及び引用文献＞

1）ＮＨＫ放送世論調査研究編，『現代人と音楽』，日本放送出版協会，1982，p.10.

2）杉山知子，小・中学生の音楽行動について（Ⅰ），美作女子大学紀要，34号，1989.

3）杉山知子，小・中学生の音楽行動について（Ⅱ），美作女子大学紀要，36号，1991.

結果の概略は次のとおりである。

① 日常の音楽行動は聴取活動が主である。

② 聴取メディアはテレビ・ラジオの他に，年齢に伴って音楽テープやCDが加わり，聴取方法の広がりが見られる。

③ 音楽行動における学校差は見られるが，地域性との関わりは明確ではない。

④ 音楽行動の原動力となるのは，学校音楽よりもむしろ学校外音楽への関心の強さである。

⑤ 学校外音楽は圧倒的多数の生徒に支持されるが，学校音楽も女子には多く支持されている。

⑥ 音楽行動・意識共に，女子の方が男子よりも積極的である。

4）小口忠彦・島田一男編著，『青年心理』，学文社，1978，p.3.

5）柿木吾郎，『エスニック音楽入門』，国土社，1989，p.89.

6）前掲書，杉山知子，小・中学生の音楽行動について（Ⅰ）

7）「音楽を習った経験」の調査において，５つの中学校は都市部と農村部で有意差が見られる。

8）アラン・P．メリアム，藤井知昭・鈴木道子訳，『音楽人類学』，音楽之友社，1980，pp.267～276.

音楽の機能として次の10種類を挙げている。

① 情緒表現の機能

② 審美的享受の機能

③ 娯楽の機能

④ 伝達の機能

⑤ 象徴表現の機能

⑥ 肉体的反応を起こす機能

⑦ 社会規範への適合を強化する機能

⑧　社会制度と宗教儀礼を成立させる機能
⑨　文化の存続と安定化に寄与する機能
⑩　社会の統一に貢献する機能

9）前掲書，アラン・P.メリアム，『音楽人類学』，p.275.

（1992年12月1日受理）

質問紙「音楽に関する調査」資料

＊以下の項目について当てはまるものをマルで囲んで下さい。

あなたの学年は……
- 小学校　5年生
- 　　6年生
- 中学校　1年生
- 　　2年生
- 　　3年生

性別は……男子
女子

1．学校外で歌をうたうことがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

2．学校外で何かの楽器を演奏することがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

3．家の人と一緒に楽器を弾いたり，歌をうたったりすることがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

4．友達と音楽の話をすることがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

5．家の人と音楽の話をすることがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

6．音楽会にでかけることがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

7．レコードや音楽テープ，CDをきくことがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

8．自分の好きなレコードや音楽テープ，ＣＤを買ったことがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

9．友達とレコードや音楽テープの貸し借りをすることがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

10．ラジオやテレビの音楽番組を聞いたり見たりすることがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

11．音楽のことがのっている雑誌や本をよむことがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない

12．自分で作詞をしたり作曲をしたりして音楽を作ったことがありますか。
　1．よくある　2．ときどきある　3．ほとんどない